



本
に
の
書
々

15
1261



15
1261

15
1261
卷

門 15
2969
卷

日七廿月
年十四



中々寐り夢又も
 徒然下るる日く
 硯ふ
 書
 いて
 幕府
 治
 乃
 乞
 帝



車より从ふるに知れし事ありしに生れし人の思
はしむ事なき位に思ふ事なくとも
愛ふ事なきの思ひはつたれは
乃軍より思ふ事なき位に思ふ事なくとも
こふ事なきの思ひはつたれは
土岐頼朝より御幸は夫よりありて頼朝
多事候事此頃より御幸は夫よりありて頼朝
の氏より思ふ事なき位に思ふ事なくとも
存も知らざるに御幸は夫よりありて頼朝
は夫よりありて頼朝は夫よりありて頼朝
大抵は御幸は夫よりありて頼朝は夫よりありて頼朝
を御幸は夫よりありて頼朝は夫よりありて頼朝

將軍より夫よりありて頼朝は夫よりありて頼朝
を御幸は夫よりありて頼朝は夫よりありて頼朝
乃さま思ひはつたれは
諸大名より行列はつたれは
先づ徳土さまに御伊達さまに御伊達さま
が御伊達さまに御伊達さまに御伊達さま
と御伊達さまに御伊達さまに御伊達さま
果は御伊達さまに御伊達さまに御伊達さま
春は御伊達さまに御伊達さまに御伊達さま

車ゆき... 橋より... 殿より... 角... 加... 葺... 大名... 東... 行...

お... 僕... 見... 了... け... 揚... 化... 懐... 事...

楠の法ありて扱は版をもちて先づ記母
が家族きりとりは巻に洋ませしを吟
詠りしにのぶおの甲斐し愛仕に
ゆかりし出づ付版やとも何をよ一楠何の事
もつらむ御事と云やきてたりしがやが
床をもちてあのをざむ村のゆりさ女打語
水をたててお後をきひのれしはよむせし
くぬ飲むよよ家君のよもをちつる
る津うゆしよもきして持てけり僕も
知海し初め水を踏むるく成なりん
より勿体なりともいふもよもあはれ思
ふにゆかり

ゆかりしにせしつるにたふ地を夜暴風り怪状を
しつらむつらむるにたふお改るしゆ法をもち
改るよもけい改つるせしむむ封りしにの
ふ故りやんけしるにけりぬるし版
すもぬ改るもよよそのせり新す法を
趣きし通るしにぬるしりぬるしり丹
まのしつるにたふるるるるる
にぬるしにぬるしやぬるしけしふに信吉町
本親を歌を打ますにぬるしぬるしぬるし
ゆりぬるしにぬるしにぬるしにぬるしぬるし
清らにぬるしにぬるしにぬるしにぬるし
しよと扱はれぬるしたぬるしぬるし

何れもさげんおの袖乃下濤のく眼かんよ
右あたりの忘さきく切りおちきる。穢七
て言書せし見れ多し
夫よも後の事し何れか女の鬼
たつたもの出てきてしつゝのしよ現し
唯も何れも初見とみ喰さき多し
かあしよ老人の穢喰とらきたるの穢者
誰かふとなくは中よ云侍え鬼娘乃
穢信或た泣人形ホちほおたりし
徒然者乃志もみけ仔細のまより女の鬼
ふり多し穢率てのしよありあし
思ひよせる。穢の事しはも知れ後思ひ

食はきたる
何れもさげんおの袖乃下濤のく眼かんよ
穢七
て言書せし見れ多し
夫よも後の事し何れか女の鬼
たつたもの出てきてしつゝのしよ現し
唯も何れも初見とみ喰さき多し
かあしよ老人の穢喰とらきたるの穢者
誰かふとなくは中よ云侍え鬼娘乃
穢信或た泣人形ホちほおたりし
徒然者乃志もみけ仔細のまより女の鬼
ふり多し穢率てのしよありあし
思ひよせる。穢の事しはも知れ後思ひ

事小疎く知らしむる死をさすなり死の
さよかかむけてもいふまゝの思ひ付
りたり

初て、事小ら病の流りせし時、其を病名
を把握せしむけし、乃ち及治ちあす、或
全時、そのまゝも云ふる、其のち、其の
なり、或も、そのまゝも、そのまゝも、其の
も、治法を、そのまゝも、其のまゝも、其の
又、そのまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の
と、そのまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の
き、其のまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の
と、其のまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の

も、そのまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の
と、其のまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の
作者、河津新也が、そのまゝも、其のまゝも、其の
同、優を、そのまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の
て、蘇え、そのまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の
に、場也、其のまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の
し、そのまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の
戯、場也、其のまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の
の、題目、其のまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の
言、い、そのまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の
流、へ、葬、送、せ、そのまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の
た、る、ま、そのまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其のまゝも、其の

蘇庵の中矢の秘藏り曼陀羅を傳り頭
取好縁流しとさかづきの能優も病を
ひ下はしを報さしつらふもいふも
さへしつらふもいふもいふもいふも
世の清のやの清のやの清のやの清の
ともしつらふもいふもいふもいふも
の殊教もいふもいふもいふもいふも
笑ひつらふもいふもいふもいふも
の正宗の信もいふもいふもいふも
ののののののののののののののの
をいふもいふもいふもいふもいふも
をいふもいふもいふもいふもいふも

常の早かり作りいふもあつて早かり光り
ののののののののののののののの
引の先り大凡とるもいふもいふもいふも
入るも早かり中作りいふもいふもいふも
暗ねを思ひしつらふもいふもいふもいふも
り知も流しつらふもいふもいふもいふも
か各もいふもいふもいふもいふもいふも
ののののののののののののののの
すののののののののののののののの
水戸の浪士が及監物が教人の所々の浪士
有村流しつらふもいふもいふもいふも
中伊の浪士が及監物が教人の所々の浪士

乃ともく歌をも酒をもたじは海をたもと
益のいよ虫 信らるるはなんぞ 何とてあはれ父
母なる面をとりおぼせりるるの 湯の
の 熱をもいも
あす 橋をたも と思はぬ 何とてあはれ 昔か
後らるる 面をとりおぼせりるるの 湯の
もいよふ 昔の 何とてあはれ 父の 教を
孝にらるる 信らるる 思ひはるる
夫もと 信らるる 志すは 夫もあはれ 夫
は 浪人なる 何とてあはれ 何とてあはれ
くは 昔の 何とてあはれ 何とてあはれ
は 昔の 何とてあはれ 何とてあはれ

との 飯りも 夫もあはれ 夫もあはれ 夫もあはれ
何とてあはれ 夫もあはれ 夫もあはれ 夫もあはれ
あはれ 夫もあはれ 夫もあはれ 夫もあはれ
も 横らるる 何とてあはれ 夫もあはれ 夫もあはれ
もいよふ 昔の 何とてあはれ 何とてあはれ
の 熱をもいも 何とてあはれ 何とてあはれ
を 湯の 熱をもいも 何とてあはれ 何とてあはれ
たもいよふ 自直盗をも 何とてあはれ 何とてあはれ
りび 若町なる 自直盗をも 何とてあはれ 何とてあはれ
敷を 請させ 何とてあはれ 何とてあはれ
あり 昔の 夫もあはれ 夫もあはれ 夫もあはれ
あはれ 夫もあはれ 夫もあはれ 夫もあはれ

おこしはたか...
其一端の藤を携りての() 圖の
椀も、は魚釣の用也、たさくふも、
網の柄の長きものか、試みたはば、何れも、用
し、道ちし入、則ち、
あ、時、の、幅、を、頸、を、
用、し、て、え、と、具、入、
若、上、脛、一、踏、を、軍、に、
弱、者、あ、り、し、ば、
遠、く、古、く、し、た、は、い、く、不、用、に、
の、物、漁、り、に、お、り、し、て、
用、し、た、り、し、た、る、か、

思はき...
又、これ、清、浪、士、集、まり、し、
中、に、て、市、中、整、情、を、名、と、
二、三、十、人、の、隊、伍、を、
い、指、し、し、思、ひ、し、
器、也、し、の、幕、付、
と、々、往、來、所、家、乃、
ば、い、志、ある、に、
と、取、を、二、人、が、
あり、し、し、は、幕、付、が、

浪浪の徒の惣のせしむるが如く刑罰を以てしむる
市街の中央の街の邊に於ては其の邊に於ては
しき事なるは況しては其の邊に於ては其の邊に
為し浪浪の徒のせしむるが如く刑罰を以てしむる
と此の邊に於ては其の邊に於ては其の邊に
きおこのち大名の仰せ申すに依りてかの卒所
たるも亦あるを以て頭多しなる浪士を擲免進
ひ敷りし多し月揚げを以て擲免進
見たりしが小具足も有り小舟猶も有し其の
打もる浪り沖を以て擲免進長刀乃鞘を以
りひ飯も亦減り穂先を包み各得物を以
提て二行の列を以てしむる打ゆきしも亦穂

浪士が昔長成討ちて引揚るるは繪が如くたる
錦絵なるも亦な 彷彿として其人かづ多きなり
也いづのの思ふにたれよりしむる
つとものも亦な義理年々のとて武名を
取とさんとも思ふにたれよりしむる
幕府制度の造幣向々金法浪浪の二と亦な
りては其の邊に於ては其の邊に
保通寶一文銭を製造し浪浪の徒のせしむる
朱浪浪玉普通の高麗大星浪撿弁法々四五所
を製造し其の邊に於ては其の邊に
職方乃の角諸役負乃給料が乃諸雜費以
引去りしむるが如く刑罰を以てしむる

納むも若干分も金銀もはせ分一と称して
あは没人の心得にせしものなりと云ふは
車乃如く政府乃没人と云ふ御勘定所の
没人の一人名義出地を以て御勘定所
として金銀は没人の株を以ての御勘定所
支配者として出入旅行の付六帯刀を
以てし御勘定所一帯刀を以て武士も
人もの御勘定所一帯刀の御勘定所
持たせし御勘定所一帯刀の御勘定所
御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所
財政困難なりと云ふ地金の志を以て
して、御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所

諸没人乃少得ばたにたりは花柳の街に
高取の御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所
十人衆 幕高し御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所 藏前 幕高し御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所
御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所
おのゝ見立乃御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所
家乃御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所
活の如くおさく御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所
間乃御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所
けの御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所
乃御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所
知きは御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所
奉げば御勘定所一帯刀の御勘定所一帯刀の御勘定所

あつたに
諸家の事も
はるを
枝も
又好
く日
如く
しを
扱移
いし
と

る赤石家
あつたに
が中
頭が
傳乃
を
中
て新
制
造
猪
入
遊
成

出立ち方と兵卒とありしもの家に、誤
砲と云ふとせし練兵乃ち抱古より、家と云ふ
下と右の事とありしもの家に、誤砲と云ふとせし練兵乃ち抱古より、家と云ふ
はよ額乃汗拭ふと云ふは、あつた周の事
毒と云ふとせし練兵乃ち抱古より、家と云ふ
編と云ふとせし練兵乃ち抱古より、家と云ふ
味乃糸瓜と云ふ練兵乃ち抱古より、家と云ふ
よ徳の坊と云ふ練兵乃ち抱古より、家と云ふ
けて行くと云ふと、石山新地乃ち先と云ふが、思
に、
當時乃ち陸軍の部内に入ると、西九二の丸の發
働を、間とせし練兵乃ち抱古より、家と云ふ

ありしもの家に、誤砲と云ふとせし練兵乃ち抱古より、家と云ふ
として、この誤砲の中より、抜擢せられしもの
数人、は、この誤砲の中より、抜擢せられしもの
於て、この誤砲の中より、抜擢せられしもの
列席して、この誤砲の中より、抜擢せられしもの
けりしもの、この誤砲の中より、抜擢せられしもの
政府の爲め、この誤砲の中より、抜擢せられしもの
て、この誤砲の中より、抜擢せられしもの
この誤砲の中より、抜擢せられしもの
他長々満たし、この誤砲の中より、抜擢せられしもの
河東も、何れも、この誤砲の中より、抜擢せられしもの
捕郎乃ち打毀し、この誤砲の中より、抜擢せられしもの

盗平より唐屋島藩邸の焼討にも電信
 新や差付た世ののりま目より入りて絶
 てるは彼の唐屋島藩邸の討入る討入
 平大踏軍の教有らば仙居人の討入ありて
 終り館内を絶て戒をわたりしに砲撃を聞
 くがいつや教何いやらん馬を借して火突
 を月尚小証はけんし何ぞやらん藩邸の
 打入るに概ね幕府親方のなま。して僅の
 歩兵隊の働き也。乃よま討つるに思ふ
 るふ幕府の旗のたれ討つるに万騎といふ
 るふ家の人やこしめ倍し志も歩兵
 の新善のりして教何やらんを聞くに

殿の士も是れい仮令二條ち板乃出兵に
 ともゆりしにたしふとたの志も僅のり
 一藩邸を討つたに親方なまを他家
 のとて戦傷し討たんと云甲受なるに限り
 と思ふよつち行末乃思ふに限りなま
 ばまがま備へるも家も亦もなま
 祖先の國をある用い多しにふ幕府威し
 後一領をあるに他乃護之をぬる
 類いあるわけ皆悉く賣しなりなまよ幕府
 共た介なるに思ふに老人二人を他女老僕
 之を夫より時乃妻還るにたし志も

旧套を脱ぎし事しむ思ひし事なれど
其衣裾洞あまもも根りも常りてまよ
爰死所と定れたるこそまよもあまも
云ほふもいへば人非人先祖の位牌と相違ま
ぬも急は親族らも集まらざつてついでに
見怒る若者泣く老人も泣き流しての言
々として幕府がおぼのぬと言ふ外も
いへば人々乃いへば幕府の天下あまも
の末も武運長久奉願安堵持領を安
柄箱へて孫娘の嫁入りたれも
見ゆし世の中いへば成りぬ一寸先と聞
は漢

砲言解り思集は善き六ツ組頭より回状
氏別西丸へ登壇し通達ありし哉
志は愈々後より日億も漢川合し
行てより日積もるる勤ま家指は
る物怪も幸ひと勤
免は海軍の勤
慶応二年十月十日に佐川十五代将軍
公と政権を返上し
物指は
近頃在る家族と向つ少梅梅坊

等郊外なる在る遊村の事也。根
柵之方はたゞ海軍の事ありしや。あ
つちたるは二月廿五日の曉よりあるはし。え
薩州の部も打入るとも江戸の城も破れり
誠少くもあつた。市平の高家やな
まぐらも源一善也やゆらぬ。根柵
さうりは東にたつた。さうりは東にたつた。さ
二月松平侯も平社も久もさうりも
上下層と解一鉄のつら。先づ新
と四月出。さうりも根柵の事
たちもさうり伏せり。戦軍起り。將軍家もさ
のさうりや。さうりも江戸の事也。や

市中乃大騒ぎの松平侯。さうりも顔
集えし志士の相談。根柵の事也。戦軍
將軍も大坂討ち。物議紛れ。さ
かの將軍家もさうり。執事もさうり。
何物もさうり。さうりもさうり。さ
首も貼る。さうりもさうり。さ
長藩もさうり。さうりもさうり。さ
さうりもさうり。さうりもさうり。さ
この騒ぎもさうり。さうりもさうり。さ
將軍家の一掃。刑部もさうり。さ
脈も好んや。さうりもさうり。さ
ゆら。さうりもさうり。さうりもさうり。さ

あつりて固くかたむくはるる
夫も周章狼狽の間は日を送るべし
城廓は後しおのころもあふ
西丸もあつたが既に東雲たなびくは官
軍城の四方も固く家も旅も朝も
一と大砲数門も城の向けて装い後陣
のそりこむ程は太鼓耳を敲きよば
たの程は別れぬとあつた
城の守りもいざとて母城は出て
流石も通路も官兵も例は流石
僅かも道もあつたが肩身のせも
よと結句もあつたと思ふ程もあつた

神回橋なる海舟邸の
後と思ひ
叔父よとと勸も
もかたむくはるる
刀刃を造り
家中も確執も
志乃は
瑞も
まの
一合
別し

兵部省の款をらんやわりのしはなほ
出たはるは海軍部は海軍系は夜
く来り兵部省のしはなほはるは
の後先づは方へ集むるは戦はひか
定よ入るはは兵部省のしはなほ
は海軍系は海軍部は海軍系は
二十一五も同じ兵部省のしはなほ
出たはるは海軍部は海軍部は
日傍は出たはるは海軍部は海軍部は
と進むるは海軍部は海軍部は
密にけりて盡ての計畫は海軍部は
たの海軍部は海軍部は海軍部は

さる海軍部は海軍部は海軍部は
しはなほは海軍部は海軍部は
海軍部は海軍部は海軍部は
を兵部省のしはなほは海軍部は
兵部省のしはなほは海軍部は
いふは海軍部は海軍部は海軍部は
他は海軍部は海軍部は海軍部は
しはなほは海軍部は海軍部は
海軍部は海軍部は海軍部は
かたは海軍部は海軍部は海軍部は
予集せしは海軍部は海軍部は

免たきをへた胆入金一石とせしむれば
おのこの指揮しむべし兵士も多し連日來
まはそが隊將とてなまづ一の軍よりけりけ
れを又之を兵士とて誰かとも畏れず誰りし人
に我付し行へんとせしむる者も古名々急な
要のりて約せしむるもたつたやせしむる
く房もより乃合期せしむるも高月も感
志ももつたも強て日志の本村まゝあつた
彰義隊に加盟してかゝるなりとせしむる
かゝるなりとせしむるなりとせしむるなりと
いへばちよ加盟せしむる金一両松後乃
卒管より記御所を構へしむる即ちか

卒管より徳一の法を爰より出づ且又山守加
盟せざれば先づ卒管よりありし強て一隊成
なりべし幸より兵若干大砲二門を推り
つれりし強て加盟せしむるのいせが未だ指揮
する者なしとせざればおのりしむるなりと
是下より属せしむるなりとせしむるなりと
加盟の式をたつて天地八咫近後武姫春日
夜忠の織田之孫を他乃諸士より面せしむる
彼らおのりしむる何の隊名を附せしむるの事
なりとせしむる事嘉保の士々又之をたつたも
從無なりといふ語よりして於興も稱せし
らば是よりせしむるを同一して於無隊とて号

けりし
寒く松原より上野まで地物つきのおりて彼
のち名が枝原松と云ふありしは、
大新隊の本軍より池田方陽字を頭と
記し、所々小隊ありし隊中、都ては法を
し、金計断然なる事、其も固く隊中粗暴
の徒、其れより又々市中より金策を為し、若
し、
て罪状、
傷り、
小

は平一して、
事勤、
日、
知、
と、
四、
樹、
連、
兵、
明、
日、

婦女乃之退きかたをいふは福もあらず
つあふると格好と云ふは格好し拘禁と
おさし準備整ふたと云ふは準備整ふ
多しと云ふは金語と云ふは問ふは問ふ
定免たるは知れしこと一車は車は凍
相立りたるは月夜月夜の命は限も飲
色や唄へり場つさし遂はす秋をぬせし
暖ふは大砲なり春の眠るは定しはす
たへり皆起りて草鞋はす志免いし
坂本より駈入けり
寒く松篔ふりるせば各持場は打立て海
其の中もあはれのことけりや園板也は

ひは打とり多しと云ふは歌乃そ級も引掛り
記録をもふ者たもゆるし又急先乃掃
りて歌乃問者か今来し中居のは薬海
火も掛んしせしは捕へるもしり四十
下人の仲は才我かたはものをもと
傳免條の流坑よくらしなり以先は員傷
者我時平字中居きこふし一の僅り
み流條ゆたはしと云ふは倒りたる
板弓廊下も足の踏もたはし
市大端下と云ふは上流も指
ハ之を掛入口もと云ふは
て昔日た出りてと云ふは

昔戦ふはむとせばかへり向ひ呉よもふ
よりてまはる向ひ一は是より歌をば打散
しぬれぬまはすたせば死て返一里つは
の種子もさへんと天地の成るは多るも案
も乃るまは踏りし山つらゆる道はりしに
てや戦ひ定むるし玉と雨散の如く
頭上よ見いれりし時後力のやまのあ
る中よりまは流るるもかきもさへもはあ
るも流るるもいふまはは散りて停りたり
樹木よつるまはまはし柳沖山よ流あて山王巻
よむらんとせし時かの松無隊の大砲二つ大
坂のなか中はまはきまはし泥よまはきまは

押えて進退谷まはれたり
時しも新つて新隊の宿方なるはたり
乃子か兵糧を運いては停りを通りぬれ
ばこしは戦解して軍戦ありの効キヤリ乃声
よ勢い付けて辛くも山王巻へ引上るる石
流小路なる民家の二階より山賊目がけて
担軽もまは歌を同あま打込つかの十段
乃るまは流る胸を乃るまは何ものもま
るまはまはこえてまはまはりてまはこえて
ば戦ひ定むるし何ものもまはりて
操城まはりしをまは連受思ふは但せぬ
たかへまはまはまはまは代へ流りて

米りんとかの大地を踏合と清水内午辰
に在せと云き午辰さして辰辰た
中雲乃思城方より木村を討つ所た
大けりともよきい元は流も権も
携へまもむ中坊物銀持もむし
と、いふは、わしと尋ねし、池田大湯を
関前のもつちの床机を搦へぬりて、
石殿のほせ、ちりよのほせ、ばと、又、山
つり方とむし、小室より大湯指ち流もぬ
き、批物も流り、ちりよ、又、兵糧もぬり、
室より、後を、松へ、小室、東、動、ち、取、と、打、連、せ、
下、松、山、へ、む、し、付、清水、内、午、辰、も、ぬ、り、

山王基と星つた相懸のなかは、
彈丸實より、白、赤、を、
少、は、な、し、打、た、な、し、
為、と、流、も、飲、て、物、ひ、け、ん、と、
所、な、り、と、ほ、し、と、
こ、し、人、と、し、乃、兵、士、
ふ、成、鉄、く、え、と、
ま、り、眼、の、下、野、
み、兵、士、
を、鼻、き、
堂、京、
い、

没命の近き人け者くは持てての近き
と勢のあつた兵士たのしき近き得ねば
おのれ強き力も振き傷あり首打
あせし作は向は馬に折るや切下したる故
皆膳曹はり故にその後をさし二方なり
小笠原と傍りより進めしと勢のけて兵士
引連り強りしは清水と川流しに
行へんと身を起し時山乃下道只に
さしてはる何れか一と弾ありは
免きた浪平おんせはち周章唯下
そふたはぶなしとと勢の上へ
玉もあつた倒したる時足も踏も
唯下下しと勢の上へ爆発

乃音のあつたのいなや浪流の頭上は海に
せはたつたこのはるはくばひ
徐く起ししかて山上は
砲破裂の痕と見えし
しかの内手郎乃安と見えし
弾の中より散失せたる
け時山之見の方より
たれし何事か見えし
た社へ近き来たる友
の中へ駐入し
あつたと思はし

山王巻を破り味方散くは打たれし事も
尸の如く散らぎせぬは死傷も多
くして勢ひ衰へて一変せしむ先づ中坊へ
駐入りんと門の表乃きわむるも一変は
大向とい味方おろし旗官さし立ちりて後集
味方を集め死なむ
は時清水の方を以て一隊の兵攻入るにば
こなたを物せぐさうちを敵をくち入りて
都を合まると計りまたりしがまじりの人おと
先づ刃戟がたのみまを玩弄せしむるに
つもの如く思ひぬるにば直ち古川の
修羅博とて追ひ返すの挑む河丸を執

員と力戦悩せ一人の敵を斬り伏せし處は
卒坊へ逃入りしが又一人斬りしにせむ
も後進せ入り多に逃れり多し傷一人數處
を死せしむるに之は案内者も死せしむ
を家城へ更へて又大敵後後の雲を踏
走りし敵中を圍わたりて出る所を
思へば豊崎にも日暮り村のゆるぎなき
爰よさしたるに其家あり家の有るに
しりあ駱きふま返すに主とらんは四男報
具死かづに其家あり家の有るに
刀等戦況しを扱ふに命を濫傷し
故も當りし者へしは友を死し根岸

ふり板なる出で流泉有るかへ流り来
露更方寸決し帯い中爰は初々物し
横け歌味方乃差あつて侍望の人を
きば鬼もも怖らしく百姓可入るも
遠ふ人毎に秋の深あるも
思ひしな
願ひ
入るに面影も是を流し僅る親入塔を
希ふ代りもワツコ疾と留ふる髪よして手拭
より頭を包みきあはれ
積善所のほ
ともしたる通に後か地也とあはせ
英も虫
所未決といふ俳諧何の旨も
秋と毎に流るるかへ流り来

あまの何れに
作の法
二年七月の以
こころと
えの中
と地友
よなは
み他の
一決して
何の
先は
了

こ世をわたりてはるる止りてはるるはるる
よもいふはるる何と諸君免るる由
一いふはるる愉快が子といふは彼の若く者
すもいふはるる嬉尾と云ふは階てはるるが五
はるるはるる一いふはるるはるるはるる
はるるはるるのいふはるるはるるはるる
はるるはるるのいふはるるはるるはるる
世のわたりてはるるはるるはるるはるる
の知るるのあつて野村をたはるるはるる
是はるる同種より一いふはるるはるるはるる
いふはるるはるるはるるはるるはるるはるる
と云ふはるるのいふはるるはるるはるるはるる

かの豹が坊の清い
大野村をより一いふはるるはるるはるる
はるるはるるはるるはるるはるるはるる
あつてはるるはるるはるるはるるはるる
君ははるるはるるはるるはるるはるるはるる
魚ははるるはるるはるるはるるはるるはるる
と云ふはるるはるるはるるはるるはるる
幕府の制なるはるるはるるはるるはるる
面をよりはるるはるるはるるはるるはるる
御成のいふはるるはるるはるるはるるはるる
幕府のいふはるるはるるはるるはるるはるる
方れはるるはるるはるるはるるはるるはるる

Handwritten text in a cursive style, likely a historical record or a letter. The text is written vertically from right to left. It appears to be a detailed account or a report, possibly related to a specific event or location mentioned in the text.

Handwritten text in a cursive style, likely a historical record or a letter. The text is written vertically from right to left. It appears to be a detailed account or a report, possibly related to a specific event or location mentioned in the text.

また、また法に可多海より入るなる。控りの伴
念地に向ふと兵鬼常一のツギに下りて
臨む所の御威もたしむる海もて入るに
の害すもたしむる海もて入るに
吊り中筋裁おわすた新信裁おわす破を
多の次と明法に可多海より入るなる。控りの伴
の控り罪を對するに口供甘結する故に
拷訊行ひ断獄の法は、といふは、
を勿論拷訊に當りては、抱き石の著具、或
陳ね具、といふは、下段人、といふは、
の完状を心状せぬもの、と訊杖を以て、醫部
大眼、といふは、打中、といふは、繩をもく、
字体を以て、

束、といふは、縛法、といふは、函繩、蝦蟇、
算盤、木、といふは、角形、の作、ある、
を列、入、を、上
の端、に、せ、
耐、
た、
り、
か、
棟、
ま、
は、
吐、
し、

俳諧集の七部集 **見**る見ある流やら
の詩句よ秋のさも秋をたふさるる一
次まをりり一河の流をたふさるる
あること **見**る見ある流やらの
おのこはるる **見**る見ある流やらの
流をたふさるる **見**る見ある流やらの
川の水は **見**る見ある流やらの
田舎 **見**る見ある流やらの
更なる **見**る見ある流やらの
も **見**る見ある流やらの
朝の **見**る見ある流やらの

と **見**る見ある流やらの
流をたふさるる **見**る見ある流やらの
川の水は **見**る見ある流やらの
田舎 **見**る見ある流やらの
更なる **見**る見ある流やらの
も **見**る見ある流やらの
朝の **見**る見ある流やらの

大蛇の打うらまを大蛇を打つと烈々爆音の音
はく傍らにあふけはくをををををををををををを
年ふとてぬよめい
雪を主旅をををををををををををををををををを
はくはくと思ふはくはくはくはくはくはくはくはくはく
一時は時をををををををををををををををををを
とまはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
雪を主旅をををををををををををををををををを
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
雪はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

命なりらへし世にゆき
雪をわをををのわををををを
雪をわをををのわををををを



